

今後、人生最期の場所は病院なのでしょうか？

ある統計によると今後予想される年間死亡者数に対して、それを受け入れられる病院のベッド数及び介護施設等のベッド数を合算しても今の増加ペースでは追いつかないのが現状だそうです。すると自宅で看取るケースも多くなることは明らかです。自分たちの家族を自宅で長期療養することに不安のない人はいないでしょう。



また、自分のことは自分で出来る(自立した生活)寿命を健康寿命と言うそうです。そして本当の寿命との間に平均して10年もの期間が存在します。この期間こそが介護を必要とする期間で、一時的に自宅で治療できない場合に限り入院しても原則として自宅療養を基本とします。この場合、治療を必要とする患者様では医師の往診が必要となり訪問看護師を含め多くの医療従事者の方によるケアが開始されることでしょう。そして毎日の仕事のようにお薬を飲んだり塗ったりまたは点滴をしたりと介護は続きます。中には数種類の薬を飲んでいたり、また臨時に処方された薬が残ったりして、現場の声として「薬を整理してほしい！」というお声をよく耳にするようになりました。薬局では、担当医師より指示がある場合、医療機関に来られない患者様の自宅を訪問して、複数の医療機関から処方されている薬のチェックを行ったり、残っている薬の整理や飲みにくい薬を多少でも飲みやすくする工夫などを行う「在宅医療」業務も行っています。



今の薬剤師は学生時代に5ヶ月にも及ぶ実習を病院や薬局の店頭で実践経験しています。医師と同年数の6年間しっかりと薬学を学んできた新しい薬剤師に未来の介護医療が任されているのです。

今後は患者様のご自宅や老人ホームにお薬をお届けして、現場のお薬をチェックする「在宅医療」が本格化するなど時代の変化とともに、我々薬剤師が活躍する場所も移り変わっていくことでしょう。

